



プロジェクトメンバーが集まり、打ち合わせを重ねる



「難民かけはしプロジェクト」の幹部メンバー。左から総務の川畑さん、共同代表の金井さん、周防さん、マスコミ担当の宮鍋さん

スポーツを通じた 難民支援

難民問題に関心をもつ学生の発案でスタートし、国連UNHCR協会の公認企画として実施されている「難民かけはしプロジェクト～学生によるマラソン難民支援～」今回はこのプロジェクトの幹部メンバーである学生4名に、その意図とプロジェクトの詳細について話を聞きました。

**東京マラソン2016を
難民学生と一緒に走ろう**

「難民かけはしプロジェクト」とは、難民というバックグラウンドをもつ学生と難民問題に問題意識をもつ学生が、ともに東京マラソン2016チャリティランナー制度を利用してフルマラソン完走に挑戦する試みです。その過程で、当事者の声や人柄・生き方を紹介し、日本の多くの人に難民の存在を身近に感じてもらうこと、またファンドライジングを通して難民支援活動への寄付や支援につなげることを目的としています。

プロジェクト発案のきっかけは、国連UNHCR協会でインターンシップをしていた周防佳汀子さん（東京大学3年生）が、東京マラソン2015で同協会の当日運営ボランティアに参加したこと。同じくボランティアで参加した友人の金井健司さん（東京大学3年生）が、大会後「自分の好きなマラソンを通じて社会貢献したい。難民学生と一般学生と一緒に走ることで、東京マラソンチャリティを盛り上げよう」と考えました。同じインターンだった山崎功乃祐さん（早稲田大学2年生）も加わり「難民かけはしプロジェクト」が始動。3人で始まったプロジェクトも、現在は約40人が参加しています。

具体的な活動としては、東京マラソン



時間をつくっては練習を重ねるメンバーたち

合同練習、広報活動を通し 学生同士の理解も深まる

メンバーは寄付金集めと難民支援への関心を高めるためにSNSでの広報、講演会、マスコミへの協力要請など、さまざま

ンのチャリティランナーとして出走するために必要な寄付(ランナー1人につき10万円以上)をクラウドファンディング^(注)で集めます。集められた寄付金は、住む場所を失った難民のためのテナの購入資金等に充てられます。
(注)クラウドファンディングとは、プロジェクト立案者がインターネットを通じて不特定多数の人から資金や協力を募るシステムのこと。

まな活動を行い、現在7人の学生がチャリティランナーとして登録しています。そのうち難民のバックグラウンドをもつ学生は、東京の大学に通うジャファルさん、関西の大学に通うシヤンカイさんとアンさんの3人です。「難民かけはしランナー」は月2回の練習会に参加したり、自主練習を行ったりして、それぞれ完走をめざしています。またプロジェクトメンバーは週1回集まって、広報の話し合いと勉強会を行っています。

金井さんは「難民というと、かわいそうな人を助けてあげるといふ視点になりがちですが、このプロジェクトでは、フルマラソン完走という同じ目的に向かって学生同士が助け合う関係が作れるのがよいと思います。一緒に練習することで、難民の人たちがとても身近に感じられるようになりました」と語り、周防さんは「東京マラソンは、お祭りのような楽しい雰囲気の魅力。そういう明るいスポーツの祭典の中で、同じランナー、同じ人間である難民について知ってほしい」と話します。

2月28日に開催される東京マラソン2016では、「難民かけはしプロジェクト」のTシャツを着たランナーたちがさっそうと走る姿が見られるはず。ぜひ応援してください。

プロジェクトの詳細は <http://nannin-kakehashi.net/>

同じ境遇の子どもたちに 勇気と元気をもってほしい



難民となり日本へ来た子どもたちへ勉強を教えるアンさん

「難民かけはしプロジェクト」の呼びかけに応え、東京マラソン2016に出場することになったアンさん。ご両親はベトナム人で、アンさん自身は日本生まれの難民2世です。出場を希望した理由を尋ねると「お世話に

なった皆さんに、がんばって生きる姿を見てもらうことで少しでも恩返しをしたい。日本の皆さんには、日本に住む難民に興味をもってもらいたい。私と同じ境遇の子どもたちには、努力は必ず報われることを伝え、勇気と元気をもつことの大切さを訴えたい」と答えてくれました。

アンさんに会ったプロジェクトメンバーの宮鍋誠さん(早稲田大学2年生)は、「最初は僕らと同じふうの学生だな、と拍子抜けするような印象でした。しかし、話を聞くうちに多くの苦労があり、努力を重ねてきたことがわかり、アンさんをはじめとする難民の人たちの存在がとても身近に感じられるようになりました」と話し、川畑真帆さん(東京大学3年生)は「実際にアンさんと会って、難民問題が他人事ではなく『自分事』になりました。そんなふうに、皆が難民問題を自分の事と感じてくれるような情報発信をしていきたい」と言います。

「今は応援してもらえばいいけど、今後は自立して、お世話になった人たちに恩返しをしたいし、難民として苦労している人のために役に立ちたい」と話すアンさん。熱い思いを胸に、初マラソンに挑戦します。